

道者御柱より一人分上ミに著座す、但俗に外科柱と稱候也、御側衆御出座御夜詰引候様に、當御番之御目付衆へ被申渡候、其後新御番頭より以下、此方共迄、御側衆目禮被致候節致平伏候、其後一人之御目付衆、時宜被致候、直に部屋へ引取申候、

〔明良帶録世職〕寄合醫師

何も家業の術を以て奉仕す、正月ハ家傳の藥を差上る、家督後幼年のもの、此場にて修業して醫道を博くまなびて、藥性を辨別したる人を選ばる、

〔明良帶録世職〕御番醫師

是は家々の醫術を以て、宿衛をなす、殿中不時の病人、非常の怪我人等あるとき、藥を與ふ、大奥向病人あるとき、御定の外醫師呼寄の節、御留守居衆より申越節、御廣敷迄罷越、御廣敷番之頭同道にて部屋へ參り、容體を診す、何れも法眼なり、

〔徳川禁令考官十七長〕寛政元己酉年四月關日

寄合醫師へ達

代々醫業致相續候者、職業之儀、別而致出精御用ニ相立候様心掛候儀、御爲之事、且銘々先祖へ對し候而も可爲本意儀ニ候、殊醫業者大切之職業、人命を預候儀を怠り可申様無之儀ニ候、以來其身一代出精無甲斐、其伴醫業等閑ニ而、并人柄等之儀相愼候事、薄き輩者、祿之多少之差別ニよらず、其時宜ニ隨ひ、家督等之節ニ至り候而も、減祿被仰付儀も有之間敷儀にも無之候、乍然其者取來候祿は、成丈先規不省様有之度儀ニ付、其身追々修業を遂、致出精候ハ、連々又御加増有之、終ニ者先規之祿ニ可被復候、右御趣意ニ付而者、寄合小普請不勤之輩ニ而も、出精次第舊祿ニ被復、御加増も可有之儀ニ候、心得之ため相達候間、何も厚く出精可被致候、

四月